

ルーマニア・シビウ国際演劇祭を観る —2014年度—

伊藤 洋

以前から観劇に行きたいと思っていたのだが、機会も時間もなくて諦めていた。ようやく機会を得て、2014年6月単身ルーマニアの古都シビウで毎年開かれている「シビウ国際演劇祭」を観に行くことができた。この年は第21回目で6月6日（金）から15日（日）までの10日間（15年は6月12日（金）から21日（金）まで）だった。今となってはもう1年以上も前のことで旧聞だが、編集委員の求めに応じてここにルーマニア往復の観劇旅行を振り返ってみたい。

I まず何故そこに行きたかったのか、という問題から解き明かそう。第一はシビウ国際演劇祭が最近めきめきとその充実ぶりで評判になり、諸外国からの参加団体も年ごとに多くなっていたことがある。それに加えてルーマニアの地方都市ストラティナ生まれの劇作家ウージェーヌ・イヨネスコ（1909~94）の出身国であり、いつかはその生まれた町を訪ねたいと思っていたことが第二の理由である。ほかにもルーマニア出身のフランスで活躍した人たち、小説家ミルチャ・エリアーデ（1907~86）、思想家エミール・ミシェル・シオラン（1911~95）などもいるし、フランスのみならずアメリカでも活躍する演出家アンドレイ・シェルバン（1943~）もいる。こうした人たちの作品を知るにつれその生地を見に行きたくなったのである。

第三にルーマニア語とフランス語の類似性がある。確かにルーマニア語もラテン語に由来する言語、仏語、西語、伊語などの「ロマンス語」の中に入るから、語彙や文法がフランス語に似通っているところがある。中央ヨーロッパでは、唯一ラテン系国家（ラテン民族の血筋）で気性も似ているだろうし、街中でもフランス語が自由に通じる

だろうと思っていた。しかし実際に行ってみると、街中でフランス語は一部にしか通じず、ほとんどが英語だけだった。

そのほかに首都ブクレシュティ（英語読み名ブカレスト）に「イヨネスコ劇場」があるのだろうと思いをしていたこともある。イヨネスコ劇場のあるのはルーマニアの隣国モルドヴァ共和国（ルーマニア人国家でルーマニア語が母語）であった。その首都キシノウ（英語名キシノウ）では、「ウージェーヌ・イヨネスコ劇場演劇祭」がかつては隔年に、今では毎年開かれている。

II ルーマニアは面積約237,500km²で日本の本州とほぼ同じ広さ、人口は約2160万人、現在は共和制国家である。東西文化の要衝の地に位置し、山地や高原が国土全体の70%近い。2007年にEUに加盟し、同年古都シビウは欧州文化都市に選ばれている。住民は現在ルーマニア人90%、ハンガリー人7%、ドイツ人2%などである。シビウ Sibiu（ドイツ語：ヘルマンシュタット Hermannstadt、ハンガリー語：ナジゼベン Nagyszeben）は、トランシルヴァニア地方南部の古い都市（シビウ県の県都）で、人口は約155,000人（2007年）、市域の広さは121km²である。この都市の名称がドイツ語、ハンガリー語で全く異なることを見ても、その複雑な歴史の重みが察せられる。

案内書によると、ルーマニア中央部のシビウは1190年にドイツ人入植者によって創設され、14世紀には商業の中心地になり、トランシルヴァニア地方で最も重要な街になった。第一次世界大戦後オーストリア帝国が解体され、シビウはルーマニア王国に併合される。人口の大多数はルーマニア人だったが、ドイツ人とハンガリー人の大きな

共同体も存在していた。第二次世界大戦後、1950年代からドイツ系の人々は次第にドイツへ移住している。岐阜県高山市と姉妹都市契約を結び、毎年のシビウ国際演劇祭にも市を挙げて協力している。

さてルーマニアに渡航するのはかなり大変である。首都ブカレストに行くのにも日本からの飛行機の直行便はないから、ウイーン、ミュンヘンなどで一度乗り換えて総所要時間は17～18時間かかる。まして地方都市シビウに行く航空便はもっと数が少なく、途中で乗り換え便を長時間待たなければならない。例えば私の場合のようなウイーン経由だと、ウイーン空港で一泊しなければならない。だから多くの人々はブカレストに行きそこから自動車で行く。その車は国際演劇祭事務局で手配し迎えてくれるが、ブカレストからシビウまで車で5時間の行程である。列車便もあるが、本数が極端に少なく日に3、4本ほどしかなく不便である。シビウ市内の移動は徒歩でよいが、ルーマニア国内の交通はかなり不便で、市民も皆ほとんど自動車で移動している。筆者も今回はルーマニア国内の旅行は全くできず、イヨネスコの生地も見られなかった。

Ⅲ シビウ国際演劇祭は1994年に発足し次第に発展した演劇祭で、今日ではアヴィニョン、エディンバラと並んでヨーロッパ三大演劇祭の一つに数えられている。演劇祭10日間の期間中、ラドゥ・スタンカ国立劇場を中心に町全体が演劇の舞台になり、演劇、ダンス、ストリートパフォーマンス(大道芸など)などが盛んに繰り広げられる。日本からも毎年何らかの劇団が招聘されて公演を行っている。14年の第21回シビウ国際演劇祭の概要は次のとおりである。

参加国数：70 か国

(日本から演劇2本『ゴドーがやって来た』と『マクベス』、ほかに舞踏2本、ダンス1本参加)

開催場所数：66 か所 (上記国立劇場ほか大学体育館なども含む)

催し物数：381 本

参加観客数：約 62,000 人

全期間滞在して筆者の観劇したものは総計で23本、その内で印象に残ったものから順に挙げてみると、以下のとおりになる。

(ロシア) シラー作『たくらみと恋』(レフ・ドージン演出)

(ルーマニア) ゲーテ作『ファウスト』(シルヴィウ・プルカレーテ演出)

(ルーマニア) ソポクレス作『オイディプス』(シルヴィウ・プルカレーテ演出)

(イタリア) ピンター作『帰郷』(ペーター・シュタイン演出)

(フランス・カナダ) ムアワド作『孤独』(ムアワドほか共同制作・演出)

(ポーランド) ストリンドベリ作『ダマスカスへ』(ヤン・クラータ演出)

(ルーマニア) スイフト作『ガリヴァー旅行記』(シルヴィウ・プルカレーテ演出)

これらの芝居については、すでに七字英輔氏が『テアトロ』誌(14年9月号)ほかに観劇記を発表しているし、『オイディプス』と『ガリヴァー旅行記』は本年10月に来日公演もあった(東京、松本)からご存知の方も多いただろう。ここではそれ以外の作品で印象に残った作品を中心に感想を述べておこう。

1) シラー作『たくらみと恋』(レフ・ドージン演出、ロシア、マールイ・ドラマシアター公演)

これこそ「古典劇」の現代的演出と言える傑作だった。私の見たもののうちではこの舞台が最も印象に残っている。シラーのあれだけ長い複雑な台詞をかなりアレンジして再構成しているが、古典劇の現代化という点ではロシアの演出家ドージンがその模範例になる見事な演出をしたと言えるのではなかろうか。

開幕するとすぐ台詞の始まる前に、ドイツ大公の息子フェルディナンドがいきなり簡素な木製の長机の上を一気に腹ばいになって滑って、町の音楽師の娘ルーゼの許に行く。恋する二人のこんな愛の場面(キスの繰り返し)がかなり長い間ある。二人の身分違いの恋愛が周りの反対に遭い引き裂かれる物語の始まりである。秀逸なのはこう

いう恋の場面が必ずと言っていいほど観察者(父、大臣、侍従長など)に見張られていることで、原作では示されていないこの観察者の存在が非常に効果を上げ、しかも時にはナチをも思わせる過酷さを感じさせていた。白と黒を基調とした衣装の美しさ、とりわけ大公の愛妾ミルフォード夫人の踊る場面の華やかさが際立ったし、それにも増してルイーゼの美しさも魅力的だった。ラストシーンは大量のろうそくの光を浴びながら祝宴の中で若い二人が毒をあおって死んでいくという美しい幕切れであった。七字氏が「シンプルな美しさが際立つ」と書き、ルイーゼ役を讃えていた。

2) ゲーテ作『ファウスト』(シルヴィウ・ブルカレーテ演出、ルーマニア、ラドゥ・スタンカ劇場公演)

この作品はブルカレーテが07年に初演出した作品の再演である。評判が良く何度も再演が続けられているが、それでもチケットは毎回完売されるという人気レパートリーである。登場人物が総勢約100人の大規模な作品である。郊外寄りの公演場所は、劇場でなく工場跡地らしい。前半と後半で観客は一度場所を移動して舞台が変わるといふ大掛かりな舞台構成の壮大なスペクタクルである。ファウスト博士を悪に誘惑するところから悪を楽しむ博士の姿まで、すべて観客を楽しませるように作られている。ここには人生のあらゆる要素が詰め込まれ、苦しみと楽しみ、生と死、愛と憎しみなどが見事に織り込まれている。メフィスト役を女優(オフェリア・ポピイ)にしているところがユニークで、またこの女優が体当たりの演技で縦横に動き回って巧みに舞台をリードしていた。あとで聞いたところ、これがラドゥ・スタンカ劇場の名女優で、ほかの芝居(『オイディプス』など)にも出演し大活躍しているのだった。

3) ムアワド作『孤独』(ムアワドほか共同制作・演出、グランT公演)

フランスとカナダの共同制作で、作者ムアワドの心底からの悩みらしきものが描かれる。ムアワドは現在カナダに住んでいるが、どこにも自己の生きる場を持ってないようで、その悩みが色濃く出ている。舞台には上半身裸の男が一人出て

いるだけで、時折父親かららしい電話で外部と話すだけである。移民で一人離れて暮らしているらしい。幻想、夢の中でその悲惨な生活ぶりを描く。壁を塗りたい、体に付けたペンキで壁にべったり張り付いて自分の跡を付けたりする。体は真っ赤なペンキだらけになる。登場人物の孤独、苦悩は伝わるが、果たしてこれだけのけばけばしい色使いのパフォーマンスが必要だったか、という疑問も浮かんでくる。

4) ピンター作『帰郷』(ペーター・シュタイン演出、イタリア、メタスタジオ・スタビレ劇場)

イタリアから持ってきたものなのか、二階の階段および二階自体が組み上げられたリアルで強固な舞台装置を使っている。イタリア人役者のそれぞれが非常にうまく、威張りくさった老齢の父親、その弟のタクシー運転手、女衒らしい次男、ボクサーの三男、そこにアメリカで学者として成功し帰国する長男とその妻、各人物の個性を明確に分かりやすく表現していた。シュタイン演出の捌きの見事さと言えるだろう。ついには男たちすべてを手玉に取って、この家の中央の大きなソファにアメリカ帰りの長男の妻がふんぞり返り不敵に笑う。このラストシーンがこの戯曲の主たるテーマ、家族関係の中での地位の奪い合いの結果を如実に示して効果的だった。

5) その他

すでに紙数も尽き原稿締め切り期限も過ぎたから、あとはまとめて少しだけ触れて終わりにしよう。

○ ポーランドのストリンドベリ作『ダマスカスへ』(ヤン・クラータ演出)

これも壮大な舞台装置だった。白い高い壁かと思いきや、土色のしゃれこーべ(模造品)を縦横にずらりと並べた棚を連続させたものだった。所々から時折人が飛び出したりする。「見知らぬ人」が自転車に乗って登場して女の人に出会うところから舞台は始まる。ただ乞食とか、医者などが見かけだけでは区別がつかず、原作の面白さ、変化は出ていない。

○ オーストリアのモリエール作『守銭奴』(バ

スティアン・クラフト演出)

舞台には奥行70～80cm、高さ2mほどの板囲いの「部屋」の装置がある。そこには椅子も机も階段もある。人物たちは天井のパイプを伝わりながら移動し、人の頭上を越えたりする。極小の空間に守銭奴を閉じ込めて、その狭い空間で生きていく家族としたアイデアは面白いと思ったが、もっと画期的なことができそうに思われた。

○ イタリアのデルボノ作『蘭の花』(ピッポ・デルボノ演出)

身障者(車椅子の人やダウン症の人)や杖にすがり老人を実際に登場させながら、人間の差別、平等の問題を鋭く風刺し、実際に見せて観客に考えさせる。うまい演出であるが、こうしていればさらし者にする事自体からきわどい微妙な問題が生まれてきそうである。

以上メモを頼りにざっと記述してみたが、昨年のシビウ国際演劇祭はやはりルーマニアの劇団が

非常に良い作品を新作や再演で出していたという思いが強い。今年のシビウには行っていないが、七字氏の報告(『テアトロ』15年10月号)によると今年は、レッシング作『賢人ナータン』、デュレンマット作『貴婦人の訪問』、ジョージ・タボリ作『我が闘争』などドイツ系のものが多く成果を挙げていたという。フランス関係では、ベケット作『クラブ最後のテープ』(ペーター・シュタイン演出、オーストリアの劇団公演)やイヨネスコ作『授業』(ミハイ・マニウチウ演出、ルーマニア・ラドゥ・スタンカ劇場公演)が上演されて評判が良かったとのことである。

付記

上記のムアワドの「孤独」は本年(16年)5月に静岡国際芸術祭に来日して、「火傷するほど独り」の題名で上演された。ムアワド自身が演じていたが、シビウ公演より広がりも出でずっと良くなっていた、ことを付記しておく。